

滝 純一展

美術

近年の具象絵画界の中でこの作家の仕事よりは特筆すべきものがある。

まず、テンペラなどを併用したマチエールの堅牢さ、その確かな技法に支えられて、地味な主題を扱いのある絵画へと高揚させていく気力は、次第にすこみのあるものになってきた。

最近のテーマは、九州の廃墟の街に打ち捨てられた野良犬だった

り、旧炭鉱の窟「軍艦島」

とか、風雪に耐えぬく老いた榎木などを描き出す。それは長崎県崎

戸や端島の、人の気配がなくなつた廃墟

跡地とか、東北地方の旅などでこの人の目にしかと焼き付いたもの

※ ※ 詩精神を鋭く輝かせ

に描かれた野良犬たちの後の姿が、暗闇の中で立ち。紅く走る速捷の輪郭。かたじけなく二頭の、無言の怒りひたつてくるのは、一人作者だけではな

一方、軍艦島を描いた「風」の島」は、コンクリートの人工島のあちこちに、暗い洞穴がぞく。海底深く艇夫たちの生き血を吸い込んだ坑道。石炭産業の残骸。犬や鳥や榎木を前に、征々とたたずんでいる作者が見えてくる。気の滅入るよう

なテーマだが、油絵のみならずだが、凝視している作者の詩精神をかえって鋭く輝かせる。作者はいつも、画面の中の一部に、不思議に白光する遠望を用意する。白光が、生きながらえるものたち、犬や榎木の上に風を巻き起こす。あるいは口を開けた廃墟が、あたかも「風集」でもあるかのよつと音を聞かせる。言い尽くせないが、その仄がりは見るものにとっても一つの救いでもある。「絵は自画像」の思いを深くした。

一九四四年、長野県生家



▲滝 純一「風地」

れ。福岡県在住。近年の安井賞展、二紀会展で活躍。大作中心にこの数年の成果十八点を一挙に並べている。20日まで、東京・銀座ニラル絵画場。(編集委員・田中 善人)